


 書評

日本精神神経学会百年史編集委員会 編集

日本精神神経学会百年史

影山任佐

本書は昨 2002 年に「日本精神神経学会」が創立百年を迎えたのを記念して発刊されたものである。学会の歩みがわが国の近代精神医学、医療の歩みそのものであることが、本書によって克明に再現されている。周知のように英仏米などの欧米の精神医学会機関誌が 1990 年代にこぞって 150 年記念号を出版した。つまり、わが国の精神医学、学会機関誌は彼らより 50 年あまり遅れて発刊したことになる。このことは内村祐之(以下敬称略)が「日本精神医学の過去と未来」と題する本学会 50 回総会記念講演において「ハンディキャップの大きさ」とすでに指摘している。とはいえ「後手の先手」というが、遅れて発刊したとはいえ、呉秀三などがわが国精神医学のパイオニアたちの先見の明により世界をリードしていた当時の欧州精神医学、医療の最良のものがわが国へ移入され、彼らの叡智と情熱、努力によってまがりなりにも近代精神医学が本邦に定着していったことは現在の時点から見ても高く評価される。ただし欧州とは言え、前記内村も指摘するごとくドイツ精神医学に著しく偏っていた日本精神医学・医療のその後の歴史的展開の評価、その功罪は現在時点で鋭く吟味されねばなるまい。つまりはアングロサクソン系の実践的精神医学・医療の欠落である。

本書は 892 ページからなる本篇と学会議事録、全国大学医学部精神医学講座と精神医学関連学会、団体などを収録した 368 ページからなる資料篇の 2 巻から構成されている。さらにはデジタル情報化時代にふさわしく、資料篇巻末には CD-ROM が付いている。創刊当時から最近までの学会機関誌の総目次索引が Data base 版に納められ、著者索引などの検索が極めて簡便になっている。さらには PDF 版では精選論文 49 編が採録されており、入手しがたい古典

的論文が手軽に読めるようになったことは大変ありがたい。すでに物故された先達者、恩師や先輩たちの名前と論文名が液晶ディスプレイにズラリと並ぶとまさしく古典が新たな生命を与えられて蘇生し、学問の永続性を実感し、新鮮な感動すら覚える。

本篇においては、昨年横浜で開催された「日本精神神経学会百周年記念行事」が冒頭にあり、次に編集委員たちによる「日本精神神経学会のあゆみ」、さらには「先輩の足跡」、「日本精神神経学会理事長時代の思い出」、「総会印象記」、末尾には「写真でみる学会百年のあゆみ」が収録されている。誌面の都合で詳しくは触れられなかったが、諸外国の学会でも類をみない膨大な資料と証言によって構成された本書は精神医学関係者のみならず、医学界、史学界、マスコミ関係者などにとって貴重な学術的資料となるだけでなく、歴史的証言のおもしろさを堪能させてくれる物語としても読めるものとなっている。広く読まれることを期待したい。本書でも随所で指摘されているように、国際的交流、精神医学教育や専門医制度、救急精神医療、触法精神障害者処遇制度、精神医療の整備などわが国の精神医学にとって未解決の問題は数多い。本書が本学会や全精神科医、精神医療にとっての生きた、具体的将来の方向を示す、歴史的羅針盤となることを願っている。

(東京工業大学大学院人間環境システム専攻・保健管理センター)

● B5判 本篇と資料篇の 2 分冊(学会誌掲載論文総目次・精選 49 論文掲載 CD-ROM 付き) 本篇 892 頁 資料篇 368 頁 計 1,260 頁 頒価 15,000 円(送料・税込み) 日本精神神経学会刊